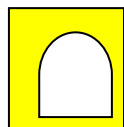


日吉台地下壕保存の会会報



第131号

日吉台地下壕保存の会

私たちは何をしたいのか。

会長 阿久沢 武史

今年度の総会が6月10日(土)に行われました。昨年度の活動と会計の報告に続いて、今年度の人事・活動方針・予算等、すべて承認いただきました。この場をお借りして、まずは会員の皆様の日頃のご理解とご協力に感謝を申し上げます。

総会に先立って行われた講演会では、本会運営委員の遠藤美幸さんから、『戦場体験』を受け継ぐということ」と題して、長年にわたる聞き取りと研究の成果が報告されました。全滅を余儀なくされた戦場から生き残った人たちから、その体験を聞き取ることの難しさ、公的な記録の陰に埋もれた真実を探ることの難しさをあらためて考えさせられました。ひとりの人間としてこの世に生まれ、人生の長い時を重ねる中で、家族にすら話せない過去を持つということがいかに重いことか。そしてそれに向き合うために必要なことは、話し手と聞き手との信頼関係であり、興味本位の聞き取りは聞き取りとは言えない——。私たちの今後の活動において、これは肝に銘じなければいけないことです。

日吉にキャンパスが開かれたのは1934年(昭和9年)5月のことでした。理想的な新学園建設を掲げて作られたキャンパスは、やがて学生を戦場に送り出す場になりました。開校から3年で日中戦争が始まり、その4年後にアジア・太平洋戦争が始まります。新しい教育を行うという理想は、戦争の大きなうねりの中にのみ込まれていきました。この時期の大学史を調べていると、「学生狩り」という言葉をしばしば目にします。治安維持法がうなりを上げるように若者や知識人を弾圧し始める時代でもありました。

昨今のニュースで目にする言葉、「共謀罪」「ミサイル発射」「テロ」「改憲」、どこかで見た風景をもう一度見ながら、かつて歩いた道を再び歩いているような不安な感覚にとらわれます。「既視感」と言ってもいいかもしれません。政治学者の丸山眞男は『『である』ことと『する』こと』(『日本の思想』岩波新書)の中で、「自由」について次のように述べています。私たちが自由を当たり前のように謳歌していると、気づいたら自由の中身が空っぽになっている。自由は置き物のようにそこにあるのではない。物事の判断を他人に委ねる者、アームチェアに深々とよりかかっていたい者には、自由は甚だやっかいなものである。大事なことは自由になろうとすること、行動することである、と。

これは高校の国語の教科書の定番教材であり、現代の高校生はこの文章によって民主主義の本質を学びます。地下壕の見学会には、小・中・高生や大学生が年を追うごとに増えていきます。私たち大人が、次代を担う子供たちや若者たちに何を伝えていくのか。既視の不安をしっ

目次

巻頭言	私たちは何をしたいのか。 阿久沢武史	1-2p
お知らせ	第21回戦争遺跡全国シンポジウム高知大会	2-4p
報告	第29回日吉台地下壕保存の会定期総会	4-8p
記念講演	「戦場体験」を受け継ぐということ 遠藤美幸	8-10p
報告	2017年第11期ガイド養成講座 佐藤宗達	11p
	*伯父さんの戦死は援蒋ルート攻防戦 佐藤宗達	11-12p
	*父の比島戦争体験 小山信雄	12-14p
報告	公開講座を聞いて 山田淑子	14-15p
お知らせ	港北図書館でパネル展&講演会を開催	15p
活動の記録	(4~6月)	16p



講演会・総会に先立ち挨拶される阿久沢会長

かりみつめ、そこにある違和感を心の中に抱きながら、私たち自身が責任ある言葉で語る必要があると思います。

遠藤さんの講演の中で、非常に印象深い言葉がありました。ビルマルート拉孟(らもう)全滅戦のある生存者(将校)は、最初なかなかお話をされようとしませんでした。遠藤さんは何度もコンタクトを取り、お願いしました。ある時、次のように聞かれ、すぐに答えることができなかったそうです。「遠藤さんは拉孟戦

を通して何をしたいのですか？」遠藤さんの聞き取りと研究は、その問いに答えるために長い年月をかけて続けられているように感じます。そしてその問いはまた、日吉台地下壕に向き合う私たちに発せられているように思われてなりません。

お知らせ

第21回戦争遺跡保存全国シンポジウム高知大会 大会テーマ『今こそ戦争遺跡を平和のために！』

【主催】第21回戦争遺跡保存全国シンポジウム高知大会実行委員会・戦争遺跡保存全国ネットワーク

【後援】高知県 高知市 高知市教育委員会 南国市

高知新聞社 朝日新聞高知総局 毎日新聞社高知支局 産経新聞社高知支局 読売新聞社高知支局
NHK高知放送局 RKC高知放送 KUTVテレビ高知 KSSさんさんテレビ 高知ケーブルテレビ

1.大会趣旨

2017年の第21回戦争遺跡保存全国シンポジウムは高知市で開催されます。

高知は、幕末維新期に西南雄藩として名を馳せるとともに自由民権運動の発祥の地としても知られており、「自由は土佐の山間より」は県詞にも詠われています。

高知市はアジア太平洋戦争末期、1945年7月4日の大空襲により市街地の大半が灰燼に帰し438名の命が失われました。高知平野は当時大本営によって米軍上陸の有力な候補地とされていたことから、数多くの「本土決戦」陣地や特攻基地が作られ、それらが戦争遺跡として残存しているところも少なくありません。また、当地には反戦・抵抗についても刮目すべき歴史が刻まれています。満州事変の翌年1932年2月、歩兵第44連隊が上海に向かって出兵しようとする前夜、榎村浩等によって書かれた出兵反対のビラが兵営内に撒かれたのです。

高知での戦争遺跡保存の取組みは、1997年の「掩体壕を文化財に推進する会」にはじまります。翌年に戦争遺跡保存ネットワーク高知が結成され、2000年には第4回戦争遺跡保存全国シンポジウムが南国市で開催されました。市民の粘り強い働きかけと行政の努力により2006年には旧高知海軍航空隊の残存掩体7基すべてが南国市史跡となり、2013年にはその内の1基の調査と修復が終わり掩体公園として整備されました。その後、「地下通信所」の保存も実現されました。

しかしこの間、浦戸海軍航空隊跡など無惨にも破壊された戦争遺跡もあります。現在は旧歩兵第44連隊弾薬庫・講堂の保存が緊急を要する大きな課題となっています。今回の高知大会を機に全国の取組みに学び保存を進めてまいりたいと思います。

周知のように日本は今、安保関連法制のもと自国の防衛とは無関係に海外で戦争する可能性のある危険な道を進んでいます。今こそ歴史の教訓を総動員して戦後 72 年間続いて来た平和を守り抜かなければならないと思います。

来年は明治維新後 150 年です。維新以後、日本は西洋文明を取り入れ近代化を図り短期間のうちに発展を遂げました。しかしその歴史を振り返る時、手放しに肯定することはできないと思います。その前半は植民地支配と侵略戦争の時代であり、アジア太平洋戦争はその帰結でした。近代日本の歴史の「生き証人」である戦争遺跡の調査・研究や保存の意義が今日ほど強く求められている時はありません。

第 21 回高知大会が、戦争遺跡の保存の現状や課題を明らかにし、相互交流を深めさらに発展させることができるよう多くの方のご参加を願っています。

2.開催日と会場

2017 年 8 月 19 日（土）～21 日（月）

- ・ 県民文化ホールグリーンホール（19 日 全体会）
- ・ 県民文化ホール多目的室（20 日 分科会と閉会行事）

〒780-0870 高知市本町 4 丁目 3-3 0 ☎088-824-5321

3.会場への交通案内・宿泊

- 高知龍馬空港から：空港バスで「はりまや橋」下車（約 30 分）、路面電車に乗り換え「県庁・市役所前」下車（約 5 分）、南へ徒歩で 3 分
- JR 高知駅から：路面電車に乗車し「はりまや橋」下車（約 5 分）、「はりまや橋」か「鏡川橋」行に乗り換え「県庁・市役所前」下車（約 5 分）、南へ徒歩で 3 分（乗り換えの際に乗り換え券をもらって下さい）
- 宿泊については、同封のマップを参考に各自で取って頂きたいと思います。

4.日程と内容

(1) 8 月 19 日（土）

① 全体集会 グリーンホール

12:00～ 受付

13:00～ 全体集会開会

- ・ 主催者挨拶（実行委員長）
- ・ 記念講演 公文 豪 先生 「植木枝盛憲法草案と日本国憲法」（休憩）
- ・ 基調報告 十菱駿武（戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表）
- ・ 地域報告 2 本程度 15:00～15:40
- ・ 閉会挨拶

15:50～ 会員総会

16:30～ 分科会打ち合わせ（運営委員）（17:00 会場閉鎖）
（交流会会場へ移動）

② 全国交流会（高知会館）＊お一人さま 5,000 円

17:30～ 受付

18:00～ 交流会

(2) 8 月 20 日（日） 分科会、閉会集会 多目的室

08:30 ～ 受付

09:00～15:00 分科会

分科会①：「保存運動の現状と課題」(第11多目的室 1F)

分科会②：「調査の方法と整備技術」(第6多目的室 4F)

分科会③：「平和博物館と次世代への継承」(第7.8多目的室を1つにして使用4F)

15:10～16:00 閉会集会(第6多目的室 4F)

分科会報告

特別決議 大会アピール

閉会挨拶

(3) 8月21日(月) 遺跡見学会(午前中)

Aコース：前浜掩体と耐弾式通信所

09:00 県民文化ホール前出発 高知龍馬空港着 11:30分 JR高知駅着 12:10

※ 懐中電灯をご持参下さい。

Bコース：旧歩兵第44連隊弾薬庫・講堂、陸軍墓地 他

09:00 県民文化ホール前出発 12:00 県民文化ホール前着

(4)図書交換 8月20日 09:00～15:00 第3多目的室(3F)

5.参加費など

参加費 一般 2000円(1日参加は1000円)

大学(院)生 1000円(1日参加は500円)

交流会参加費 5,000円

昼食弁当代 600円(8月20日)

遺跡見学会 Aコース バス代 2,600円

Bコース バス代 2,400円

6.申し込み

- ・ 申込は別紙申込書に該当事項を記入の上で申し込んで下さい。
- ・ 申込は7月31日までにお願いします。

7.現地実行委員会組織

実行委員長 平和資料館・草の家館長 岡村正弘

事務局長 幅 国洋(全国) 出原恵三(現地)

事務局次長 岡村啓佐

会計 太田紘志

事務局 〒780-0861 高知市升形9-11 平和資料館・草の家

☎088-875-1275 FAX088-821-0586 メールアドレス GRH@ma1.seikyuu.ne.jp

報告

総会議案

第29回 日吉台地下壕保存の会 講演会・定期総会

日時：2017年6月10日(土) 12:30 開場

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎シンポジウムスペース

主催：日吉台地下壕保存の会

※以下の議案はすべて異議なく承認されました。

2016年度活動報告

◇会員数：個人 353 名 交換・寄贈団体：97 団体

◇定期総会開催：第 28 回 2016 年 6 月 4 日(土) 来往舎シンポジウムスペース

記念講演 『兵士の手紙を見る・読む・考える“命の便り” 軍事郵便から見えるもの』

講師：新井勝紘さん(専修大学元教授)

◇運営委員会開催：2016/4-2017/3 11 回

◇会報発行：5 回 125 号(4/26)～129 号(2/22)

◇地下壕見学会：2016/4-2017/3 48 回 2,440 人

◇ガイド学習会：2016/4-2017/3 6 回 菊名フラット

見学会ガイドの連絡・学習会。

◇第 21 回平和のための戦争展 in よこはま：

2016 年 5 月 28 日(土)～6 月 1 日(水)

神奈川県民センター 展示参加 日吉台地下壕紹介・日吉地域の空襲被害等

◇港北図書館パネル展示会・講演会：展示会

2016 年 7 月 19 日(火)～8 月 14 日(日)

ミニレクチャー 2016 年 7 月 31 日(日)、8 月 14 日(日)、

講演会 8 月 7 日(日) 中高生向け特別授業『日吉台地下壕を知っていますか』

◇第 20 回戦争遺跡保存全国シンポジウム長野県松代大会に参加

2016 年 8 月 20 日(土)～22 日(月) 地下壕見学、映画会等(参加者 350 名)

主催：戦争遺跡保存全国ネットワーク、第 20 回戦争遺跡保存全国シンポジウム
長野県松代大会実行委員会

後援：長野県、長野県教育委員会、信濃毎日新聞社、TBS テレビ信州他

8/20：開会前行事(象山地下壕見学会、「キムの十字架」上映会)

全体会(朗読劇「女たちのマツシロ 2016/松代大本営平和祈念館会員」、記念講演

「発想の現場としてのマツシロ～私の取材ノートから/児童文学作家・和田登さん」、

基調報告「戦争遺跡保存の現状と課題 2016/全国ネット共同代表・出原恵三さん」、

地域報告「熊本、松代」、全国交流会(松代ロイヤルホテル)

8/21：分科会

第一分科会「保存活動の現状と課題」

第二分科会「調査の方法と整備技術」

第三分科会「平和博物館と次世代への継承」

8/22：フィールドワーク 象山地下壕内部、舞鶴山方面

◇第 24 回川崎・横浜平和のための戦争展開催：2016 年 10 月 22 日(土)～23 日(日)

展示会、若手教育者の発表、シンポジウム (川崎市平和館)

◇第 10 回日吉フェスタ：2016 年 11 月 5 日(土) 慶應義塾大学日吉キャンパス

日吉エイジ主催(学生と地域住民参加の事業) 書籍販売・キャンパスツアー

2 回実施(参加者 40 名)

◇八王子の戦跡と浅川地下壕をめぐるバスツアー：2016 年 11 月 27 日(日) 参加者 21 名

コース：日吉駅―戦災樹木の銀杏並木―犬目神明神社裏山に残る爆弾坑あと―湯ノ花ト
ンネル空襲慰霊碑―浅川地下壕―「弾痕の残る柱」がある JR 高尾駅ホーム―解散

◇第10回公開講座：2016年3月19日(土) (来往舎シンポジウムスペース)

『アジア・太平洋戦争末期の日本海軍』講師：吉田裕氏(一橋大学教授)

◇港北区地域のチカラ応援事業

公開提案会 2016年4月23日(土) 港北区役所4階1・2号会議室

中間報告会 2016年11月5日(土) 港北区役所4階1・2号会議室

最終報告会 2017年3月4日(土) 慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎

◇ガイド養成講座：第10期 2016/1-5 修了者12名、第11期 2017/1-5 修了者4名

※2016年4月12日(第10期4日目)に、駆逐艦“雪風”乗組・元年少兵の西崎信夫さんによる講演会を開催

※2017年3月4日(第11期2回目)には、「戦争体験を聞く」というテーマで川崎中原の空襲・戦災を記録する会の中野幹夫さん、保存の会のメンバーによる講演会を開催

◇聞き取り調査：日吉台地下壕勤務の元電信兵の方の聞き取り調査を行った。

2017年度日吉台地下壕保存の会

運営委員・会長・副会長・
会計監査・顧問

会長 阿久沢 武史

副会長 亀岡 敦子

喜田 美登里

羽田 功

運営委員

石橋 星志 上野 美代子

遠藤 美幸 岡上 そう

岡本 秀樹 木村 航

小山 信雄 櫻井 準也

佐藤 宗達 杉山 誠

鈴木 清俊 谷藤 基夫

中沢 正子 宮本 順子

茂呂 秀宏 山田 譲

山田 淑子 渡辺 清

会計監査 熊谷 紀子

山口 園子

顧問 鮫島 重俊

東郷 秀光

2016年度 決算報告

(単位 円)

費 目	2016年度予算	2016年度決算	備 考
【収入の部】			
会費	320,000	268,460	214名
見学会資料代	500,000	691,060	内訳別項
図書等頒布	100,000	217,106	
寄付金等	0	43,593	
港北区補助金	0	85,500	港北区地域のチカラ応援事業
繰越金	558,717	558,717	
計	1,478,717	1,864,436	
【支出の部】			
運営費	130,000	158,205	各種会費・打ち合せ等
事務費	120,000	148,724	事務用品費等
印刷費	70,000	113,359	会報・資料等
通信費	200,000	223,605	会報送料等
図書資料費	130,000	112,420	参考書籍・販売書籍
交流・交通費	100,000	191,886	全国集金・各平和展賛助金等
謝礼	50,000	65,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	459,000	見学冊子5000部
予備費	478,717		
計	1,478,717	1,472,199	
差引残高		392,237	

見学会開催費用内訳

収入の部	支出の部	保険料	
見学会費用	915,100	案内経費	47,740
		※資料作成費	176,300
合計	915,100	合計	691,060
			915,100

※資料作成費は2016年度決算の見学会資料代に計上しています。

以上の通り報告します。

2017年6月4日

日吉台地下壕保存の会

会 計 亀岡 敦子



この報告により収支を監査したところ、適正に処理されていることを認めます。

会計監査 熊谷 紀子



会計監査 山口 園子



2017年度 予算(単位 円)

費 目	2017 年度予算	備 考
【収入の部】		
会費	300,000	
見学会資料代	500,000	
図書等頒布	100,000	
寄付金等	0	
繰越金	392,237	
合計	1,292,237	
【支出の部】		
運営費	150,000	各種会合・打ち合わせ等
事務費	140,000	事務用品費等
印刷費	110,000	会報・資料等
通信費	250,000	会報送料等
図書資料費	110,000	書籍・資料等
交流・交通費	100,000	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	80,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	
予備費	152,237	
合計	1,292,237	

収入の部の会費は前年度実績をもとに計上しました。

2017年6月10日

日吉台地下壕保存の会運営委員会

2017年度 活動方針

日吉台地下壕保存の会は、1989年4月に慶應義塾の教職員と地域住民の有志約100名で発足し、今年で28年目を迎えました。この間、地下壕の調査研究と保存運動、見学会の開催、会報の発行などを活動の基本に据えながら、県内のみならず全国の戦争遺跡保存団体との連携も深めてきました。

昨年から定例見学会をそれまでの月1回から2回に増やしました。一般向けの見学会に加えて、小中高の学校単位での見学会をガイドする機会も確実に増えています。平和教育や歴史教育の一環として、港北区だけでなく遠く県外の学校からの見学希望の問い合わせが絶えません。大学のゼミ単位での見学会も増え、慶應高校生徒会主催の定例見学会は今年で3年目を迎えます。次代を担う子供たちや若者たちに向けて、私たちがどのような言葉で語り、何を伝えていくのか。どのようにしてこの貴重な遺跡を残していくのか。私たちの役割はその重さを増しています。

ここ数年、特に力を入れている活動のひとつに聞き取り調査があります。今年も一人でも多くの方にお会いして、戦場や空襲の体験、地下壕勤務の体験などをお聞きしたいと思います。今年も継続して横浜市港北区の「地域のチカラ応援事業」に参加します。会の活動を通

して学んだこと、知り得た事実は、港北図書館でのパネル展示や講演会、「横浜・川崎平和のための戦争展」などを通して、広く地域社会に向けて発信していきます。

私たちの足元には全長5キロ以上に及ぶ地下壕があります。自分の足元を見つめることは、自分自身の「いま」を見つめることにつながります。戦争遺跡は一般に「負の遺産」と呼ばれますが、それを通して戦争や平和の意味を考え続けることで、「負」は決して「負」ではなく、私たちが語る責任ある言葉につながっていくと考えます。

以上を踏まえ、2017年度の活動として、以下の方針を提案します。

活動方針

- 文化財指定早期実現を文化庁・神奈川県・横浜市に働きかけ、地下壕を保存する。
- 慶應義塾・横浜市・神奈川県・国への働きかけを、港北区民をはじめとする地域住民と協力して行う。
- 小・中・高校生及び広く一般市民などに対して平易でわかりやすい見学会を実施する。
- 戦争遺跡保存全国ネットワークの会員団体として、全国的な保存活動に参加する。
- 日吉台地下壕見学会の内容をより充実させるために、ガイド養成講座・講演会・学習会を開催し、運営する。
- 横浜・川崎平和のための戦争展を開催する。
- 神奈川県内の他団体と連携し、日吉台地下壕についての展示や講演を行う。
- 日吉台地下壕の学術調査・研究を深める。
- 運営委員会の活動をより一層充実させる。

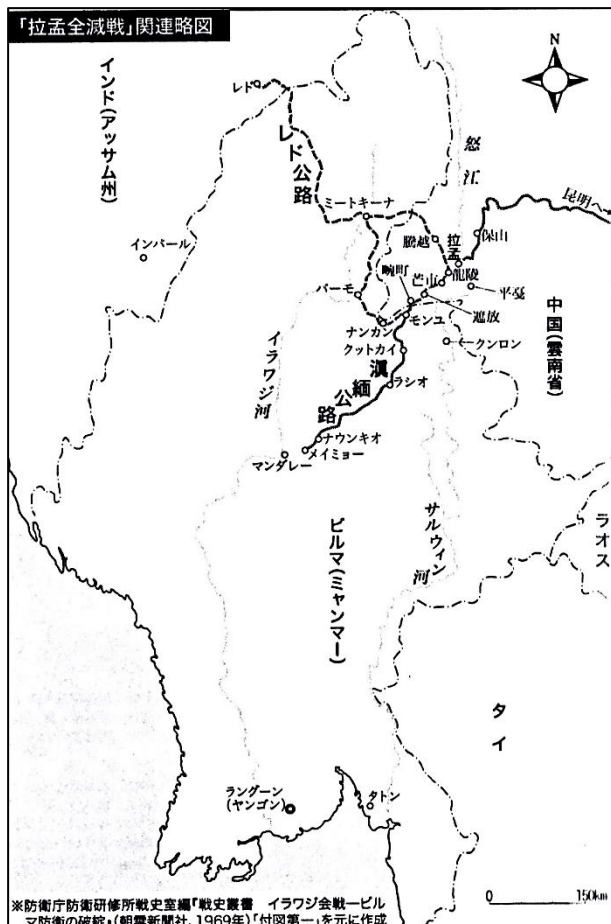
記念講演

「戦場体験」を受け継ぐということ

—ビルマルートの拉孟全滅戦の生存者を尋ね歩いて—

拉孟（らもう）戦とは？

運営委員 遠藤美幸



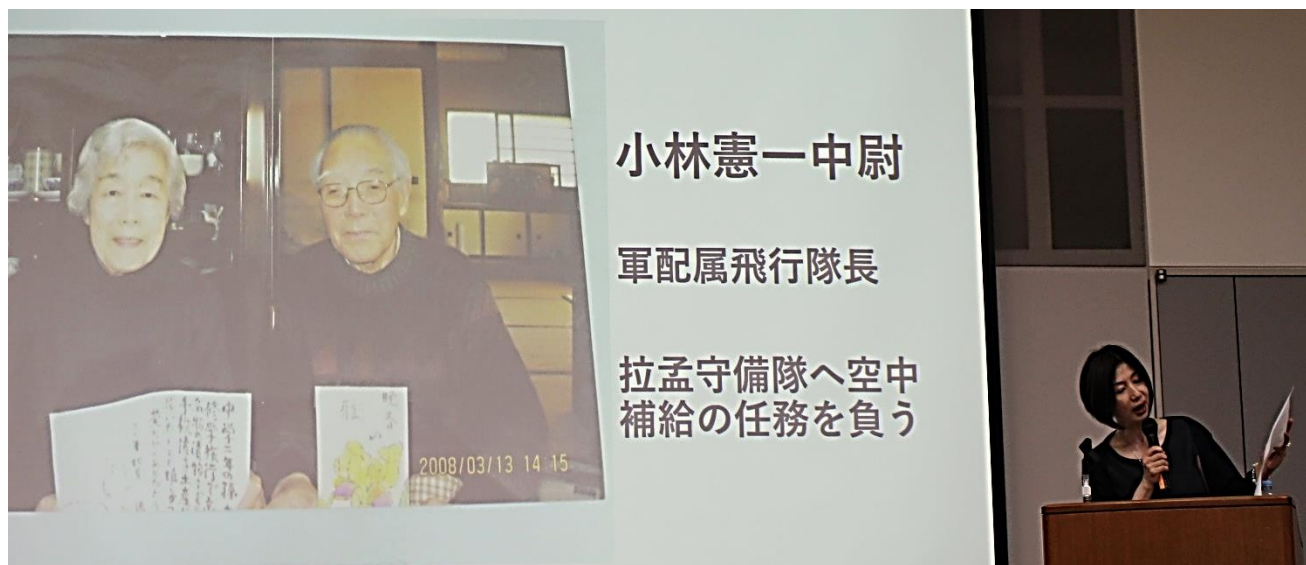
1944年9月、絶対国防圏が崩壊し、旗艦を失った海軍の連合艦隊司令部が日吉にやって来ました。同時期に、陸軍においても拉孟守備隊(約1300人)が、日本から遥か遠い中国雲南省の山上で、約4万の米式装備の中国軍を相手に100日間の死闘の末全滅しました。洋上の孤島でもない内陸部での全滅は、戦史上類がありません。

そもそも日本軍が雲南省まで侵出した目的は、英米連合軍による中国軍(蒋介石軍)への軍需物資の補給路を遮断することにあります。1944年頃の補給路は、インドのレドから北ビルマのミートキーナ、バーモ、ナンカンを経て、中国雲南省の芒市(ぼうし)、龍陵、拉孟、保山、昆明に通じるルートです。ビルマを横断し中国に至ることから「ビルマルート、」あるいは中国では「滇緬(てんめん)公路」とも呼ばれています。滇は雲南を、緬はビルマを表します。雲南省での戦闘にもかかわらず、拉孟戦をビルマ戦線と見なすのはこのような理由からです。

拉孟戦をひと言でいえば、ビルマルートの貫通をめぐる、それを拉孟で遮断したい日本軍

と貫通させたい中国軍（米軍支援）の激しい攻防戦です。無謀な作戦で有名なインパール作戦（1944年3月-7月）の失敗後、拉孟戦はビルマ防衛作戦の「最後の砦」として一挙に重要視されますが、実際の拉孟戦は勝算のない戦闘でした。慢性的な兵力不足、制空権がないこと、十分な軍需物資の補給がないことが主な理由です。最終的に、拉孟守備隊には最後の兵まで死闘を命じられます。拉孟は、「最後の砦」どころか、軍上層部が撤退する際の時間稼ぎの「捨て石」にされたのです。

敗戦まで続いたビルマ戦線の戦死者は膨大で、投入した兵力は約33万人、うち19万人が戦死し、その戦死者の8割が戦闘ではなくマラリヤ、赤痢、脚気、栄養失調などが原因の餓死や傷病死でした。まさに「地獄のビルマ」です。



講演される遠藤美幸さん

拉孟研究者になるまでの軌跡と研究の「深化」

今から30年以上も前の話です。ニューヨーク行きの機内で、当時JALのキャビンアテンダントであった私は、偶然に拉孟戦の関係者に会います。彼は中国軍に包囲され孤立無援の拉孟陣地に航空機から軍需物資を空中投下した元飛行隊長でした。当時はまったくその事実を知る由もありませんでしたが、奇縁に導かれて機内の出会いから17年後に私は拉孟戦の研究を始めることになります。全滅戦のため生存者はわずか十数名で、その大半は現地で捕虜になり戦後復員してきた人たちでした。例外として、守備隊長の命令で、全滅寸前に報告任務のため陣地を脱出した将校がいました。元飛行隊長からの紹介で私はその元将校にコンタクトを取りましたが、脱出将校の口は固く閉ざされ、なかなかインタビューに応じてもらえませんでした。将校の身で生きて帰ってきたことに彼は生涯苦しみ続けたのです。ようやく話してくれた全滅戦の内実は言葉では表せない過酷な戦場でした。山上陣地の拉孟では、一日8000発の空爆と雨季による豪雨で、糞尿と赤土が混ざり合った壕は容易に崩壊しました。ビルマルートを遮断する作戦を策案した参謀（少佐）にも直接インタビューしましたが、参謀から発せられた言葉は衝撃的なものでした。勝算のない作戦だとわかっていながら上層部は命令を下し、最後は拉孟を見捨てました。拉孟陣地には朝鮮人「慰安婦」15名と日本人「慰安婦」5名の20名の「慰安婦」がいました。前線陣地に「慰安所」があるのは稀ですが、軍がそれほどに拉孟を重要視していた証拠です。戦後、生還した北朝鮮出身の元「慰安婦」の女性は、恥辱に満ちた過去に生涯苦しみ続けて亡くなりました。インタビューだけでなく、英米中連合軍側の一次資料や兵士たちの手記なども読み込み、2012年春に拉孟の戦場を実際に見て歩きました。元将兵らが皆そろって口にした拉孟の「赤い土」をこの目で見ました。

長年の「戦場体験」の聞き取りから学んだこと



松山戦場跡記念碑（中国では拉孟と呼ばずに、松山と呼ぶ）

1. 「戦争体験」を決して軽んじてはいませんが、私はあえて「戦場体験」に拘っています。両者の違いは、体験者が戦闘員であるか否かに依ります。戦争体験は被災あるいは被害体験が主ですが、戦場体験には加害性と切り離せない体験があり、その体験こそが戦争の本質だと思うからです。元兵士たちの話したくないこと、話せないことの中に戦争の「真実」があります。加害体験は話したくないこと、話せないことの筆頭です。

2. 元兵士たちの語りは多面的で複雑です。彼らの語りのねじれや矛盾の背景を知ることでも大切で、これは一筋縄ではいきません。従軍の時期、戦場、兵科、階級、敗戦の迎え方、戦後の生き方などが複雑に関与して戦争の見方が多様化します。

3. 日吉台地下壕保存の会の存在意義にも関わりますが、戦争を知らない世代の継承として、戦争遺跡の活用は非常に有効ですが、美化された物語の継承だけではない、「負の遺産」としての継承が不可欠です。したがって、ガイドの力量が問われます。

おわりに―「戦場体験」を受け継ぐということ

戦場（戦争）の継承を考えると、私たちはどのような未来（社会）を望んでいるかを真剣に考えなければなりません。そのために何を継承すべきなのか、いま、私たちは問われています。70数年前の戦争はもう過ぎ去った歴史事象で、いまに生きる私たちには関係ないのでしょうか。過去の戦争には直接関係のない世代でも、未来の「選択」には重大な「責任」があります。過去を知らずして現在も未来も語ることはできません。

私が JAL に在職中に史上最悪の御巣鷹山墜落事故が起きました。私には直接事故を起こした「責任」はありませんでしたが、組織の人間として、社内の中に蔓延る様々な問題が重大事故を起こした遠因であったことに深く責任を感じ、私は自分の生き方を問い直しました。会社に異議を唱える組合に移ったことで、会社から嫌がらせや苛めを受けました。人生の難しい局面に遭遇した時、皆さんは何を行動基準としますか。保身や目の前の利益に左右され、長期的な物事の判断を見誤ると未来に大きな禍根を残すことになります。私たち一人ひとりの判断と選択が日本の未来を形作ります。戦争の本質を見極め、その本質を継承していくことは、いまの私たちの社会の舵取りに重要な判断基準を与えてくれるものだ確信します。戦争とは決して過ぎ去った物語ではなく、いまの社会を考える有効な題材となります。



現在の滇緬（てんめん）公路

報告

第11期ガイド養成講座終了

運営委員 佐藤宗達

今期は1月14日開講、4名の方が受講、5月20日に終了しました。第二回講座は3月4日開催：戦争体験を聞く。川崎中原の空襲・戦災を記録する会の中野幹夫さんからご自身が描かれた絵を紙芝居のように見せながら体験談をお話していただきました。その後当会メンバーによる体験・親から聞いた話等をしてもらいました。鈴木信二さんの私の空襲体験（以上は130号に掲載済）、小山信雄さんの父の出征・捕虜体験、佐藤宗達の伯父さんの戦死（今号に掲載）、茂呂秀宏さんの船橋の通信塔跡で遊んだ事、喜田美登里さんの東欧の戦跡見学ツアーに参加して、と普段は聞けないお話ばかりでした。お話しは順次会報に掲載中です。

第三回講座は4月15日開催、午前・午後と日吉台地下壕群を廻るフィールドワークをしました。普段は行けない艦政本部地下壕の入口も確認しました。第四回講座は5月20日開催、ガイドの手引きを基にガイドの要領、時間配分を確認しました。その後フリーディスカッションをして、茂呂さんからまとめ：日吉見学ガイドで志していることをお話してもらいました。最後に亀岡副会長より受講者に修了証が手渡され養成講座は終了しました。なお7月8日に拡大ガイド学習会を開催してガイドの実際をレビュー・検証する予定です。

報告

“第11期ガイド養成講座（第二回）“戦争体験を聞く“
伯父さんの戦死は蒋援ルート攻防戦 「虎」と「虎」

運営委員 佐藤宗達

- (1) 蒋援ルート：重慶の中華民国政府へ軍需物資を援助するルートを蒋援ルートという。ビルマルート、新疆ルート、香港ルート、仏印ルートがあった。日本軍は仏印ルート遮断のため北部仏印進駐(1940年)をおこなった。

- (2) 飛虎隊(Flying Tigers)：蒋介石は米国・ルーズベルト大統領に軍事援助を要請した。派遣されたシェンノートは戦闘機100機と優秀なるパイロットが有効であると具申。中立国である米国はアメリカ合衆国義勇軍(American Volunteer Group:AVG)として当時英国の植民地であつたビルマ・ラングーン郊外キャダウ航空基地に派遣・発足。中華民国軍に入り飛虎隊と命名、1941年11月ごろからビルマ、中国(雲南省・昆明)で日本軍と戦闘する事となった。1942年7月、米国は日本と交戦しており義勇軍である必要



がなくなった事から義勇軍を解散、米空軍 CATF に編入した。その後も飛虎隊として活躍、日本軍を悩ました。使用機：カーチス社製 P-40（二枚の写真：何れもハワイ島航空博物館にて撮影）、機首の下に「シャークテース（鯊の歯）」を描き後部胴体には飛虎が描かれている（ウォルトディズニー・スタジオのロイ・ウィリアムズのデザイン）



(3) 虎部隊(独立飛行第十八中隊) 1937年日本陸軍は偵察専門部を編成：

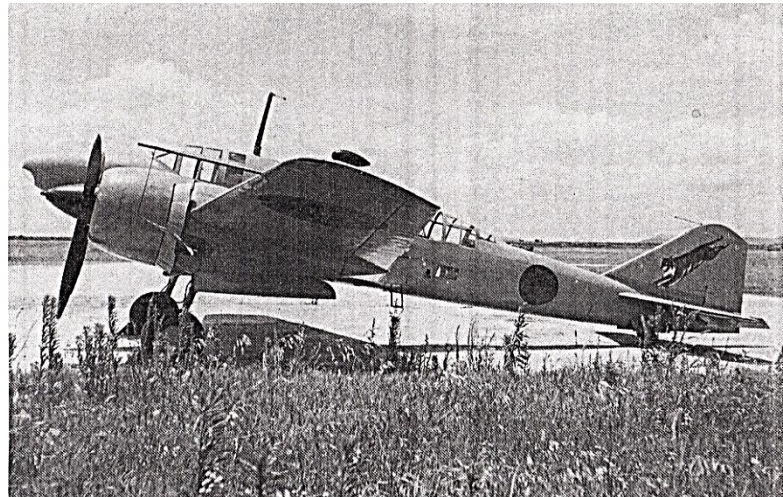
青木部隊が天津で発足、以後作戦により拠点を移す。1938年8月 司令部偵察中隊となり独立飛行第十八中隊と命名、航空兵团直轄。漢口攻略、奥地進攻(重慶空爆)南支攻略(南寧)そして1941年1月 蒋援ルート遮断のためハノイ(ジャラム飛行場)に移動、恵通橋、昆明飛行場の搜索等にあたった。その後は漢口を拠点として南支方面の作戦に従事、1945年には日本本土決戦に備えるため京城に移動、大邸で終戦を迎える。使用機：当初は97式司偵、1942年7月より100式司令部偵察機二型、1944年6月には同三型。尾翼の虎のマーク：1939年ごろ尾翼にマークを描く事となり「虎は千里を征き千里を還る」に肖り整備兵が描くようになった。1943年にはフライングタイガーに対抗すべく漢口在住の高木画伯にデザインを依頼、終戦まで尾翼を飾った。

(4) 「虎」と「虎」

中国華南特に雲南省・昆明は飛虎隊の拠点であり、一方虎部隊は、漢口・広東を拠点としていたため遭遇する事があつた。とりわけ1943年2月飛虎隊は桂林方面に進出、日本軍は第三飛行師団で対抗、偵察虎と飛虎が戦闘する場面が出てきた。以後、重慶、成都、昆明、などで遭遇するが1945年に京城に拠点を移したので遭遇する事はなくなった。

(5) 伯父さんの戦死：

母の兄、佐久間喜壮少尉は1919年生、1940年陸軍入営、甲種幹部候補生、航空通信学校、下志津陸軍飛行学校を了て偵察将校となり1941年11月虎部隊に配属、以後作戦により上海、漢口、ハノイ、広東等で従事1943年4月24日零陵方面に偵察飛行「零陵、天候不良のため搜索不能、帰還す」と打電後未帰還。操縦は大黒栄蔵中尉、陸軍士官学校出身、当時中隊長代理。



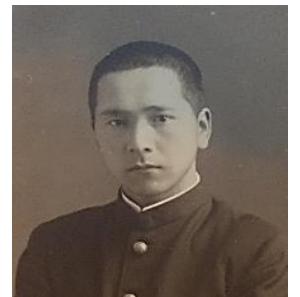
高木画伯描く「虎」の100偵二型(昭18年5月・於漢口)※尾翼の「虎」に注目！

報告**父の比島戦争体験**

運営委員 小山信雄

昭和19年7月3日、私の父(小山勝 大正12年生)を乗せた大型外航貨客船「日昌丸(約4千名乗船)」は、合計10隻の輸送船団の一隻として門司港を出帆し、一路南方のフィリッピン(以下、比島)に向かった。この年3月に21歳で教育召集として陸軍に入隊した父は、6月に動員召集令状(赤紙)が発令され、南方派遣歩兵大隊要員として編成待機し、出帆の日を迎えることになった。7月といえば、マリアナ沖海戦で日本の海軍は空母や航空機の大半を失い、サイパン島守備隊の全滅で絶対国防圏を突破された時期である。西太平洋の海は米潜水艦が跋扈し、日本の輸送船は魚雷攻撃で次々と沈められ、バシー海峡(台湾・比島間)は「魔の海峡」と呼ばれていた。援軍の友軍機は殆ど飛来せず、対潜装備もない輸送船団は、ジグザグ航法で魚雷攻撃から逃げ惑いながら、一隻は撃沈されたものの7月13日、辛うじて目的地のルソン島マニラ港に辿り着いた。

一月後に最終目的地となるミンダナオ島サンボアングに着任し、日本では経験したことのないような猛暑の中、予想される米軍の上陸に備えて、豪州に退却した米軍の支援を受け続ける現地ゲリラと対峙しながら、日夜飛行場建設等陣地構築の日々を送った。10月20日に



入隊時の父

は、米軍のレイテ島上陸が開始され、陸に海に日本軍は壊滅的打撃を受け、制空権、制海権、戦闘能力も殆ど失うことになるが、年明け昭和20年3月10に米軍はミンダナオ島にも上陸開始し、父所属の独立第361歩兵大隊(田中大隊:1,103名)は米軍と戦闘状態に入った。

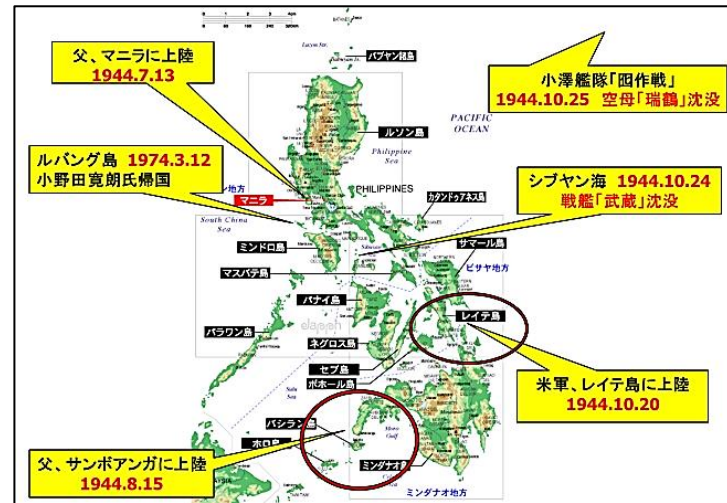
戦闘とはいいいながら、フル装備(B25爆撃機、P38戦闘機、武器・食料を満載した輸送船団を従えた大艦隊、戦車等)の米軍と、素手に等しい日本軍(航空機が殆どない飛行場、次々と輸送船が沈められ物資が極めて不足等)とでは勝ち目は全くなく、明け方から絶え間なく続く艦砲射撃、空爆で降り注ぐ爆弾の雨の日々に耐え忍びながら、夜間、38式歩兵銃と銃剣を手に、電気鉄条網、集音機、サーチライトの間を潜り抜け、米軍の陣地に斬り込み作戦を敢行するのが最大の作戦。

7割もの死者を出した決死の作戦にも拘らず、ひと月程で部隊は撤退せざるを得ず、以降約半年間、ミンダナオ島のジャングルを「転進」しながら、迫撃砲、空爆、ゲリラそして飢餓・病気と日々闘い、終戦後も2カ月間捕虜になることを潔しとせずに抵抗を続け、10月10日に投降し、レイテ島タクロバンの収容所で1年間の捕虜生活を送った後、昭和21年11月6日に復員船で名古屋に帰還することになった。尚、捕虜時代のことについては、厚労省社会・援護局から取り寄せた資料(米軍作成の、Records for POWS等)から一端を窺い知ることが出来ました。衣類、食器類、髭剃り、歯ブラシ、石鹸等の配布データ(1年間で5回)、定期健康診断の診断結果まで残されています。ジャングルの中を彷徨い続けた父達は敵国の「捕虜対応」に対して、どこまで想像出来ていたのでしょうか。父は収容所の中で虫垂炎を患ったようで、手術の経過が投薬の種類、血圧・脈拍等事細かいデータと共に記録されています。

比島戦では日本軍63万人(陸軍50万、海軍13万)の兵力が動員され、47万人(陸軍は7割)が亡くなった。父は行動を一番共にした中隊単位(第四中隊)では、総兵員178名の中の54名の生還者の一人です。戦闘死よりも飢餓や病気による死が遥かに多く、「飢餓による栄養失調、疲労による全身衰弱の身体に病気(マラリア・赤痢・下痢等)の追い打ちで、

全ての将兵は上記の何か一つにかかっていた、というのも過言ではなかった」との事であり、塩の摂取のために夜間海岸に出て敵の目を盗みながら、海水を煮詰めて塩分を採る等もあったとのこと。

父は戦争の内容について詳細を語ることは殆どありませんでしたが、「とにかく何時でも腹が減っていた」という話は良く聞かされました。私の家族は毎夏、逗子海岸で行われる花火大会を楽しみに海岸に出掛けて行きましたが、父だけは一人家に籠って、花火見学を避けていました。「艦砲射撃を思い出してしまう」と後日漏らしたことがありました。私は大学生の頃、比島旅行に行きサンボアングの父の部隊の戦闘跡地や米軍上陸記念碑を訪問したことがあります。今回の養成講座で話す機会を得られたため、詳細情報を調べたいと思い、父は10年前に他界しているため何とか情報入手出来ないかと考えた挙句、「追憶の南十字星★フィリピン・サンボアング」という本の存在を知ることができました。父の所属していた部隊(田中大隊:1,103名)の部隊付軍医として従軍されて



昭和54年5月5日発行
発行人: 萩 361 比島会

いた方の纏められた本で、元々は“戦没者慰霊碑建立報告書”の刊行であったものが、「手記として残したい」との多数の関係者の方々からの声にこたえて1冊の本(442頁)となったもので、本稿の多くはこの本に記されていることです。

現在、国内外の戦線に指令を出したり、戦況情報を受け取って来た連合艦隊司令部(地下壕)のガイドの一人として活動していますが、武器も食料もシェルターも全く不十分な海外の激戦地で戦ってきた戦士達の環境を考えると、「この違いは一体何なんだ!」と深く考えさせられます。戦争の本当の真実は何だったのか、をもっともっと知らなくてはならないと感じており、これからも学んでゆきたいと思います。サンボアンガには是非もう一度訪ねてみたいとは思いますが、当地は長年イスラムゲリラの跋扈する地帯であり、先月戒厳令が発令される程の危険地帯となっており、残念ながら訪問は出来そうもありません。



米軍上陸のカリアン海岸に建つ米軍上陸記念碑(昭和20年
サンボアンガ・ライオンズクラブ建立)



「友愛の碑」



元田中大隊中隊長建立の木製墓標を訪ねる筆者
(1974.7 筆者学生時代) この墓標が1年後建立
される慰霊碑の母体となる。

報告

公開講座を聞いて

運営委員 山田 淑子

第11回地下壕保存の会公開講座

大学は戦争の何を「引き継ぐ」のか?

—慶應義塾における実名と実物の継承の試み—

慶應義塾福沢研究センター

都倉 武之

2017年4月8日(土) 慶應義塾日吉キャンパス 来往舎シンポジウムスペース

【講演要旨】

はじめに、アジア太平洋戦争における「慶應義塾の戦没者と空襲被害」から講演の全体を見通す視点としてその実態が述べられた。戦没者は全体で2,226名、うち学徒出陣による学生は385名、その中で特攻兵海軍5名、陸軍32名であり、昭和20年4月が最大数。空襲被害は、三田ではレンガ・木造校舎など(建物疎開一部有)が、信濃町医学部では木造校舎・病院が全滅、日吉は木造校舎、慶應義塾の校舎等の建物の5割がなくなり、その後の米軍による接收で慶應義塾は校舎・施設等4割で戦後のスタートとなった。

このような「慶應義塾と戦争」の実態を立体的に肉付けし、その本質に迫るため、アーカイブ・プロジェクトを発足し、オリジナル資料(一次資料)の収集、広範な聞き取りの実施、基本的な数値の解明、これらの公開方法の検討を行う。実施状況としては、オリジナル資料と

しての実物 2,000 点、聞き取り 100 名、昭和 16 年 3 月から昭和 25 年 3 月までの在学者全員のデータベース化。特にこれらの資料等の公開は学術資源、社会的資源として重要であること。

このプロジェクトでは、党派性を越えたもの、慶應義塾全体の取組みという意識から多様な議論と見解を見据える視点。民主主義の根幹として検証を可能にするため記録の保存が必要である。昨今聞き取りによる記録の保存は盛んに行われているが、「私文書」の保存の意義が低いという問題点。戦争体験については、一般的、普遍的体験はない。具体的であることこそ重要で、語られるもの、語られないもの、日常の体験など多様な人々を想起して掘り起こしていく視点。慶應義塾にこだわる視点。これらがプロジェクト活動の視点となる。

資料収集から次のようなことが見えてくる。その例として

- ・上原家資料のリアリティーでは、良司、「所感」の相対化の必要
- ・同種の資料の差異では、署名入りの日の丸の類似性・多様性
- ・軍隊と学生では、一枚の水兵集合写真特攻の雰囲気 昭和 24 年三田会 戦後の服装
- ・戦時下のキャンパスでは、金属供出サボる学生 国賊福沢諭吉 塾長小泉と塾生
- ・戦時下の恋愛では、特攻死した水泳部主将の婚約者
- ・戦後の家族では、「太郎湯」(回天特攻で戦死した塚本太郎を偲んで家族が風呂屋の名前にした。)

まとめとして、

- ① ディテール(実名・実物・エピソード)を残すことが大切で、例えば戦争を表現するにしても、先の大戦・太平洋戦争・大東亜戦争・アジア太平洋戦争と語る人により違いそのことで、その人の背景にある立場を象徴することになり、顔が見えてくる。こうして様々な観点から検証を可能にする。
- ② 「継承」とは、忘れないこと、話題にし続けること、(立場を越えて)議論し続けること。主体としての「人」を中心に戦争を考え、具体的であることの重要性、そして自分の頭で「歴史を学ぶ」ことが引き継ぐことになる。

【感想】

「継承」は、いわゆる戦争の歴史を学んで伝えていくことではない。主体としての「人間」と戦争の関係、身近にある具体的な体験、経験などを掘り起し、自分自身とのかかわりの中で戦争を考えること、そこが「継承」の出発点になるということがより明確にされたのではないかと感じた。

保存の会においても今期のガイド養成講座で空襲体験、ガイド自身の戦争体験、ガイドの父や伯父の戦争に係る資料など収集し整理したものを話してもらった。このことにより私たちガイド自身も戦争を自分の中で位置づけ直し、そこから考えたり、学んだりしたことを受けとめてガイドをする。これこそが真に生きたガイドをする手立てとなり、「継承」の担い手になることができるのだらうと思う。

お知らせ

港北図書館でパネル展&講演会を開催します！

運営委員 小山信雄

7月31日(月)から8月27日(日)迄、港北図書館のご協力を頂き、菊名の横浜市港北図書館1階の“港北まちの情報コーナー”にて“日吉台地下壕パネル展”を開催します。日吉の大学キャンパスに残る貴重な戦争遺跡について、少しでも多くの方々に知って頂き、戦争や平和について見つめ直す一助になればと願っています。8月6日(日)10:30からは、同図書館2階の会議室で、一般の方を対象とした講演会も行います。

活動の記録 2017年4月～6月

- 4/22(土) 定例見学会 32名 港北区地域のチカラ公開提案会(港北区役所)
 4/24(金) 地下壕見学会 慶應高校生徒会 25名
 4/26(水) 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会(かながわ県民センター)
 4/27(木) 会報130号発送(来往舎205号室)
 5/6(土) ガイド学習会(菊名フラット)
 5/8(月) 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会(かながわ県民センター)
 5/10(水) 定例見学会 52名
 5/20(土) 第4回ガイド養成講座(来往舎)
 5/22(月) 運営委員会(来往舎205号室)
 5/23(火) 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会(かながわ県民センター)
 5/27(土) 定例見学会 28名
 5/29(月) 地下壕見学会 慶應高校生徒会 25名
 5/31(水) 地下壕見学会
滋賀県近江八幡市立八幡中学校 225名 ⇒
 6/1(木) 平和のための戦争展 in よこはま
 展示場設営(かながわ県民センター)
 6/2(金)～4(日) 第22回2017 平和のための戦争展 in よこはま
 見つめよう!語り合おう!戦争の過去と今(5月29日・横浜大空襲から72年)
 開催(かながわ県民センター) 報告・朗読劇・講演・展示500点
 6/8(木) 地下壕見学会 滋賀県近江八幡市立八幡東中学校 72名
 6/10(土) 第29回日吉台地下壕保存の会 定期総会(来往舎シボ・ジウムスペース)
 記念講演 『戦場体験』を受け継ぐということービルマルートの埜孟全滅戦
 の生存者を尋ね歩いてー 講師 遠藤 美幸 氏
 6/12(月) 日吉地区センター 日吉台地下壕連続講座①座学 40名(日吉地区センター)
 6/14(水) 定例見学会 55名
 6/19(月) 地下壕見学会 日吉台地下壕連続講座② 日吉地区センター 40名
 6/21(水) 地下壕見学会 横浜国大人文学部人間文化課程 20名



★地下壕見学会は予約申込が必要です。

毎月2回実施(第2水曜日10時～12時30分 第4土曜日13時～15時30分)

お問い合わせは見学会窓口まで Tel・Fax 045-562-0443 (喜田 午前・夜間)

★定例見学会予定 7/12(水) 7/22(土) 8/9(水) 9/13(水) 9/30(土)

★夏季見学会予定 7/29(土) 7/31(月) 8/4(金) 8/5(土)

(定員に達している日もあります。お問い合わせ・予約はお早めをお願いします。)

8月10日～31日まで見学会はありません)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15 Tel 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町 2-1-33 Tel 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会

郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 阿久沢 武史

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会